

淨

土



道久

十一月號

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十八年四月二十八日運輸省特別授受記録第三五二號
昭和二十八年十一月十五日發行

第十九卷

十一月號

運ちやんの佛教觀

先夜、深川佛教會に新興宗教の話をしに行つての歸り、遅くなつたので車を呼んで頂いた。門口までそのお寺の御住職と奥さんと子息とが見送つて下さつた。

しばらくは暗い道を、黙々と操つていた運轉手氏、やおら客席の私に問いかけた。

「今のお家は、お寺ですかね」

「そうだよ」

「すると今送つて出た女の人……ありやお寺の奥さんですか」

私は何氣なく、同じ答をくり返えした。すると彼氏、ものの三十秒も、フロントを見つめたまゝ考え込んでいたようだったが、やがて口を開いて、また云つた。

「へえー、お寺さんでも奥さんいるんですか」

此奇問——決して奇問ではないのだが——にはいさゝかへきえきしてしまつた。その答えに迷つて、黙つていると、

「てえと、坊さんはいいですねー。わッしに伴が一人いるんですけど、こいつ體が弱くてね。運轉手は出來そうにないんだが、坊さんになれたらいいな」。

眞底からの思ひのこもつた言葉を吐いたのである。

私は此の會話に注釋を加えたくはない。然し、たつた今講演して來た新興宗教が何故流行するかという問題に對する、一つの解答がこういつた人々の佛教寺院——僧侶生活——の見方の中にあることだけは附記しておきたい。

(竹中)

11月号—淨土—目次

詩仙堂の銀杏……………吉田絃二郎(1)

勢觀房源智上人のことども……………小俣昌雄(29)

或る水死せる老人の爲に……………須藤隆仙(20)

現代の法然上人傳……………佐藤賢順(10)

入信のみちびき……………大橋俊雄(12)

私の讀書遍歴……………椎尾法主(4)

讀書思出すまゝ……………岸門主(8)

讀書の心……………千葉僧正(9)

宗教・文化……………竹中信常(14)

仏教……………真野龍海(17)

阿彌陀寺……………折原教詮(18)

現代の短歌(太田水穂)……………上木彙葉(26)

京都奈良を巡りて……………齋藤昭俊(28)

光と音……………(24) 芝園だより……………(表3)



詩仙堂の銀杏

末田 紘子

昨夜の台風で庭の辛夷^{コナシ}の實が枝ごと千切られて、地にたゞきつけられてゐる。

いつの年も辛夷の實が紅くなるころは、武藏野をわたる渡り鳥の群が四五十羽くらゐづゝやつてきてはさかんに鳴きかはしながら辛夷の實を啄く。今年も三四日前から、朝早く飛んできてはあわたゞしく語り合いながら辛夷の實を啄いてゐた。

いつの秋もわたくしは木の實を啄く渡り鳥のおしやべりを聴くのを楽しみにしてゐた。渡り鳥たちはたしかに何か言葉を持つてゐるらしい。かれらはたしかにおしやべりを

してゐるらしい。わたくしは遠足にゆく幼い子供たちのおしやべりのリズムと同じ幼いリズムを渡り鳥のおしやべりに感ずることができると。

ブラウニングの詩に「ビッパ―過ぎ行く」といふのがあつた。ビッパ―は無邪氣な小娘である。かの女は工場の休みの日、放たれた小禽のやうなうれしさに胸をふくらませて歌をうたつて街を歩く。街には世俗的な野心や憤りに胸の炎を燃え立たせてゐる大人たちがゐた。

かれらは、ふと、ビッパ―の無邪清淨の歌を窓の外に聴いて、心を淨められ、恐ろしい罪業から遁がれる。

ビッパ―はその一日に幾人かの魂を救ひつゝ、なほ美しい歌をうたひながら、嬉々として日暮れころ工場にかへつてゆく。

遠足にゆく子供たちのおしやべり、渡り鳥の群のおしやべりもまたビッパ―の美しい歌とおなじく、わたくしたちを無邪清淨の世界に誘ふ。

このころ信州から訪ねてきた友人は渡り鳥について語つてゐた。

「もう間もなく日本を立つて、遠い海をわたつて南方に飛んでゆかねばならないので、あらしに吹かれた際や、にはかに方向をかへなければならぬ際などの飛び方を、親鳥が毎日子鳥に教へてゐますよ。一種のトレーニングをやつてゐますよ。」

何氣なしにわたくしたちが見てゐる小鳥の世界にも涙ぐましい親子の愛、天地間の慈悲が動いてゐる。

今年は九月の二十日にはじめて庭の木立に鶯ひたきが訪れ、それから六日おくれて目白が鳴いた。

年毎に聴く小鳥の聲ではあるが初めて聴く聲はとりわけ心にひびく。こゝにはビッパ―の歌の功德はある筈だが凡夫の悲しさには尊い機縁も失つてしまふ。

たゞ年々に訪れてくる小鳥を待つ心をめぐまれたただけでもありがたいことだと思ふ。

京都に行つた時詩仙堂の庭に落ちてゐた銀杏の實を拾うて、裏の畑の隅に播いたら三本だけ芽生えてきた。その中の一本は盗まれて、残りの二本だけが今では二丈ばかりの木になつて、晩秋には黄金の色の落葉の風情を見せてくれる。

その銀杏の下に立てば竹の奥の寂びたる詩仙堂や、庭を流るゝ美しいせゝらぎや、そこにある鹿追ふための添水そみづ唐臼からうすや、はては世を捨てゝ淨う棲みなした石川丈山の姿まで

が思ひ出される。

わたくしにとつてはその二本の銀杏はありがたい機縁の木である。ビッパの歌である。

しかし盗んで植ゑた人にとつては詩仙堂の銀杏もたゞの銀杏に過ぎぬであらう。

詩仙堂の銀杏に近く小さいな柚子の木が二本芽生えしてきた。わたくしはその柚子の實を持つまで生きてゐたいと

掲示板

眠むられざる者には夜長し

疲れ倦みたる者には道遠し

愚者にとつて生死は長し

正法しょうぼうを知ることなければなり

——出曜經——

念じた。柚子は十年待つてもなかなか大きくならなかつた。

一昨々年の秋のことであつた。土地の人は「柚子の枝に柚子の實を持つてきて刺してやるのです。そうして實のなることを若木に教へるのです」と語つた。

わたくしはもう一本庭にある古い柚子の木の實を持つてきて、二本の若木の枝に刺してやつた。

その効果か、去年の秋には二本の若木にはじめて二三顆づゝの柚子の實がなつた。そして今年は二本とも二三十顆の實を結んだ。若々わかわかしい柚子の實は日に日に色づいてゆくそして新鮮そのものゝ光りを帯びてゐる。

わたくしは若木の柚子の實を仰いではもつと生きのびてゐたいと思ふ。

この凡愚の心を佛さまはやさしい眼で見てをられるやうな氣がする。

訪問記

私の讀書遍歴



増上寺

椎尾法主

五歳の門前小僧

「僕は元來簡素で美しいものが好きなのだ
がね、今はこんな雑然とした所に住んでいる
んだよ」

と、能面の翁の様な顔を、ほころばせて、
あの特獨な聲で高らかに笑われる。

成程、部屋は十疊程であるが、机の上も、
座席の廻りも、書類だの本だが、山の様に

雑然と積んであ

る。茶の衣を着ら

れた大僧正が、そ

の中にどつかりと

あぐらをかいてお

られる。ここでは

あの恐ろしい程の

威厳は影をひそめ

て、好々爺といつ

た感じがつよい。

勿論、それは記者

に對するよりも、

丁度來あはせて居

られた身内の二人

の婦人の爲であつたに違いない。こんなに氣

輕な氣持ちの中で、遠慮しながら聞き始めた。

「先生の御幼少の頃の讀書とか、印象に残

つて居る精神生活の思い出とか、そんなこ

とをお伺ひしたいのですが」

「それは餘りみな知らないことだし、こ

の婦人方も聞きたいだろうから話してやろ

う」

ホットした記者は、圓星をあてた喜びを秘

めながら、筆を構へる。

「大體、僕は五歳の頃から四書五經の類を

讀んでいた。いや讀んだと言うより、聞き

覚え、見覺えたといつたがよいかな。

僕の兄は、佐藤牧山門下生で、椎尾佐とい

うのだが、その兄のもとに母日入れ替り、立

ち替りして教へ子が來る。僕はその側で母

日見ている。その内に、知らぬ難しい漢字を

覚え、本を讀む訓練をうけてしまつたのだ」

すかさず

「門前の小僧、習はぬお經を讀むと言うも

のですね」

「そういうわけだ。六、七才の頃になると

三部經を讀むことも教へられた。何せ、伴

僧をせにやならぬので、覚えねばならぬと

言うわけだ。しかし何分にも、それ程漢字

を知つてゐるわけでもないから、本などみ

ていても、兄等にとつてもついて行けぬので

いつの間にか字を見失つて困つたこともあ

つたよ。ウアツハハ」

今をときめく靈僧も、そんなときがあつた

のかとほくそえむ。それにしても、五、六才

で、どん／＼漢籍を讀む様になられたという

話などは、今時の者には考へも及ばぬことで七八十年程も前のこととはいふものの、今昔の感に堪へないものがある。

音楽と圖畫は大嫌い

「僕には元來嫌いのものが三つある。體操と、音楽と圖畫なのだ。所が、當時出來た小學校にはそれがある。僕はそれが爲に小學に行くのが嫌で、塾に通うことにした」

「そう言はれますけど、今日も大正大學で音楽法要をやつて居られたではないですか」

「昔と今とは違つてゐるんだ。今も、本堂で音楽法要のよさをぶつて來た所なんだから。音楽嫌いな僕も、この頃はラジオ等で聞いて少しは分る様になつたからな。所で



今話しているのは昔の話だから、君、間違へちやいかんよ」

とたんに叱られてしまつた。先生の止まざる精進は、こうした所にも出ている。餘り老人扱い等すると、とてつもなく叱られる。先生

の活躍ぶりは、今更いうまでもないが、大正大學の關口部長は、最近、支部結成で全國に同道した感想に

「先生は全く超人的と言うよりは、殺人的な精力の持主だ。とても僕など叶はない」

となげて居られた程だ。白く太い眉毛の下で、細く鋭く目が光る。とてもこわい。

「塾では、晝間は漢籍について、色々な指導が行はれ、夜は夜で討論會が行はれてね……」

廿代 先輩に食ひさがる

「この討論會というのが又面白い。この頃の様な俗っぽいものではない。或る本の論議を責任者が順次にやり、その意味、内容について、どん／＼突込んだ質問をするんだ、相手がつまるまで追ひ込んで金星を得るのが楽しみだつた。僕等、子供のくせに、相當漢字も知つていたから、先輩等、口惜しがるのが、斷然頭張つて食ひ下つたものだ。先生までも困らせる様な問題を出した時等、大金星で威張つたものだつたよ」

どうも、この邊まで來ると、かつての聖ぶりがあらはれて來る。それは、又次の様な所にもある。

「十三才の時に、今の東海中學校の前身が出來たのだ。幸にもここには、體操、唱歌

がないので、喜んで入る事にした。しかし何分にも、兄坊主達がたくさん居るので、寺では入れてくれない。それでも、兄坊主達より遙かに何でもよく知っているもんだから、受験させてくれたら、一番で入學して、とうとう豫備科を通りこして、一年に入學してしまつた」

まことに、恐れ入つたものである。あの物凄う記憶力は、正に人間業ではない位であるが、決して、すら／＼と行つたのではないといはれる。全くの努力がその裏にある事を知らねばならない。特に後年、阿含の研究等は同じ原本を三冊まで切りばりしてやつたので、殆んど何處にどの様なことがあるか暗記しているとか。そういへば教壇で、本一冊なしにすらすらと出典をあげられたときは、記者等も學生の頃舌を巻いてしまつたものだ。

學課をよそに讀書

「中學に入つても、一般學科はつまらなくてね。英語くらいだつたかな。よかつたのは。數學等は低級だし、佛教關係のものはどうも氣に入つたのがないしね」

「それでは、どんな本を讀まれましたか」「八宗綱要啓蒙錄とか、法相、唯識關係のものは随分よんだ。その爲、餘りよく知つていたので、先生も舌を巻いていたこともあつた。法相、唯識は、非常に論理的で、すじが通つていたため、大變すきだつた」「唯識三年、俱舍八年」といつて、佛教では、一番難しいと云はれる法相、唯識が、一番面白いと言はれるに至つては、又何をか云はんやである。

「十八才の時は上京してね、宗學本校に入つたわけだが、やはり唯識、法相等主に讀んだし、律三大部も大いに讀んだ。あの頃の先生にも、いいかげんな人が居たね。外部から來た人等、随分反對して追い出した事があつたな。悪いこともしたもんだよ、ハッハッハ……」

「文學もよんださ」

「これ以後の先生の御研究は、己に一般の知る所ですから、話を轉じまして、文學書とか、一般書等について御伺ひしたいのですが、文學等餘りお讀みではないでせう

ね」

「何！ 君は失敬なことを言うね。」大聲、一番、お叱りを受けて、大恐縮。

「しかしだね、ありきたりな文學等は讀まないよ。大いに讀んだ中では、源氏物語とか、日本外史、古事記等は大いに讀んだよ。特に古事記等は、研究の實も大いにあげてある」

「明治文學等はどうですか」

「それにしたつて、今でこそ、明治文學といつてゐるが、その當時は未だ生きた作家が活躍中だからね。いはば、はやりの文學ということになるから、つまらぬのは讀まんよ。もつと讀む本等は、いくらもあつたからね。それでも、紅葉や露伴のものは、大變文章が美しいので讀んだものだし、樋口一葉のものなども、小石川だつたかに居たので、そんな關係からも讀んだもんだよ」

聞けば、英獨文學など、原典でよんだことがある由にて、この點、また、輕々に、文學等と、いいかげんなことをいうと、とてもなく叱られそうなので、先づはこの程度

にして置く。何物にも通ぜざるない先生を前にして、愚論をはくなどは、正に禁物である。

この頃の讀書は淺薄だ

「昨今の讀書は如何ですか」

「目が見えんから、讀まない。ラジオのニュースを聞くぐらいなものだ。だから何がどの様にあるか、餘り知らん。」

「何か、讀書週間でもありますので、御意見の様なものでもありましたら」

「この頃の讀書傾向を察するに、淺薄でい

かん。もつとたんねんに讀まんといかん。學問の面でいへば、或る論文を讀む場合、必ず其處には參考文獻があつてあるのだから、それを全部目を通し、その上に、自分の研究を加へて行けば、必ずその論文よりよいものになる。ところが、この頃ではそんな努力をしない様だね」

ここでは、學問研究の方法を教示された。

「批評一つにしてもだ、一寸ある部分だけを讀んで云々するでは駄目だ。作家等でも、そうした批評を受けて居て、ロクな發展を

しない。思想家も生命は短いといへるね」仲々、ここでは、ズバリと斷言される。

「おまけに、あの頃の様に、やれ出版だ、やれラジオだ等と、原稿に追ひまくられてゐる様では、全然よいものは生れて來ないだろうな。」

中には、天才の一人、二人はいても、そんなもので事足りてゐる様ではいけない」われわれは、この教訓を、長い経験と、努力により培はれた金言として、胸に收めて置きたい。記者は、他の客もあることであり、お忙しい事でもあるのでこの邊で辭意を表すると、

「まあ、茶でも飲んで行き給へ」

と大きなまん頭を頂き、パク／＼食う。「俺は欲がないから小さいのを食う」と言つて先生も食べられる。

「君、餘りひどい事を書くんでないよ」

「いえ、ありのままを書かせて頂きます」

「何を言うかね。要點だけしか筆記して居らぬくせに。それに尾をつけ、ひれをつけて書くんだらう。ハッハッ……」

全く、油斷もスキもあつたものでない。裏

を神通眼でみすかされた記者は、早々と御前を辭する事にした。(Y)

淨土へのたより

○淨土へ何か書きたく思ふのですが、武生の晋山、加行等あり心も落付きませんから、何れそのうちと考へます。皆様が淨土を熱心にやつて下さる事は、ひそかに御隨喜申しております。淨土宗も將來はもつと文書傳道をやらなくてはなりません。他の宗教に比して慨かましい事です……(清淨華院・石橋僧正)

○久しぶりに編輯の方と會ひ舊情をあためえてうれしうございました。淨土に對する責任を重々感じとつてまいりました。一つづつ正確に實行してゆきたい所存です。

(長野縣諏訪郡心光寺・澁谷賢應)

○私は當療養所入院加療中有志による佛教研究會清輪會という如來信仰の集いを持つて居る者です。佛教のこの面に對する援助を強力にお願ひしたい。……貴會發刊のものなど何分とも御頒布下さい。矢吹さんの「法然上人」などあればいいと思うのですが……(東京都清瀨病院・船津定祐)(近刊各十部取不致お送りしました。尙同會發行ダンマ二二號を寄贈された。——編輯部付記)

讀書思出すまゝ



知恩院岸門主

門主に會つた記者は期待に外れて若く見えるので先づ一驚した、そして柔和な面貌には何か會う人に有難さを感じさせずにはおかない。ぼつぼつと法主室に隣接する落着いた應接間で註文をのべる。

門主は讀んでは居りませんがと云いながらお話下さつた。

「私は宗教大學を出て三年の研究生をやりましたが、最初の二年は大鹿僧正につきましました。僧正は一年で自坊に歸られたので、私もついて行つて教えて戴きました。法隆寺の佐伯僧正について居た頃は、高井さん（眞言宗智山派前管長）と一緒にした。最近高井さんの遺稿「密教事相大系」が出版されました、

私にも寄贈して下さいました。少しづつ讀まして戴いて居りますが、とてもいい御本で御座いまして、大變結構です。淨土宗では事相というものの、即ち儀式的なものは少いのですが、多少天台、眞言をとり入れて居りますから、その點非常に有益で御座います。又最近「法華經義疏」が出て居りますが、それを拜見させて戴き、少しづつ讀まして戴いて居ります。花山信勝さんの岩波からお出しになったものではよう讀みませんでした、今度の法隆寺から出たものはよう讀んで居ります。この夏に石井教道さんの選擇集の研究と密教事相大系とを讀まして戴きました。今のところは、朝起きて動行に出ます前少しばかりの

時間法華經義疏を讀んで居ります。

私は學生時代から文學趣味がありまして、漱石さんのものを随分讀みました。特に歌（和歌）が好きでして、最近では行誡上人の歌をくり返えし、くり返えし讀み、味つて居ります。漢詩では唐詩選（岩波の三冊本）が好きですが、哲學書は學生時代必要に迫られて讀んだ位で、特別に讀んだというものは御座いませんが、寛克彦さんの佛教哲理にはとても興味をもつたものでした。宇井伯壽さんの印度哲學研究はもつて居りますが、あまりよく讀みません、しかし姉崎さんのものは全部讀んで居ります。それも宗教大學時代に講義をきかして戴いて何か引かれるところがあつたからなのでしよう。」

廊下までお見送りを恐縮しながら、いとまを告げて、知恩の壯大な伽藍を後にしながら門主の人柄が、その讀まれる本をよくよく自分のものにして居ることをつくづく感じた。

讀書の心

黒谷千葉僧正



本堂で法要を済まされた千葉僧正は庶民的な物腰に、しつかり信仰を體得、その上にすべてを建設するといった御方である。記者が突然の訪問の次第をのべると困りましたなあとおつしやられて以下のお答えを戴いた。

今まで私は御法語をくり返えして、只さつと見ていたばかりでしたが、じつくりと見るとひしひしと身に迫るものがあつて、有難とう思つて居ります。廣く讀まなくとも、一つものを深く見て、身に受けとつて行く。そうしますと、す通りしていたものが非常に身を感じることもあることをつくづくと感じさせられます。ただ教義のことだけではなく、人生のことについて注意してくれることが非常に多い。

特に消息文がそうで、色々と種々な人達にあげられたああいう消息文の文面などを見てくると、私は選擇集などの教義でなく、宗祖大師が實地の人に與えて下さつたものをじつ

くり讀んでいつて、自分でそれを新しく受けとつていくことが、私の讀書なのでして、人生の實地ということ、社會のこと、年老いて猶更かも知れませんが、人生實際ということについて、どうしても注意をするようになります。

念佛にしても、宗祖大師がおつしやつていゝる念佛せなんだら一體どうかという、なんでもない一句だがこの片言一句にこの頃非常に注意をひかれるのです。云うまでもないことだが實際に念佛は難行に對する相對的な易行と心得て、大抵の人はただこの片方だけに立つてゐる念佛であると思う。本當に知るといふ意味がはつきりとせんようなことで、すごしえていましたが、今日人生がすべて念佛ですむことを教義の上から立てて貰わねばならないのですが、知るといふことはピラミットの頂點で、その底邊をなすものが凡ゆる佛教で、そうなつてこなければうそだし、そうならな

くてはならない。そしてそれをはつきり知つて居る人は少なからうと思います。理屈は色々あるが。魂の上に受けとられてゐるか疑問に思う。法語を見てゐると自分の脚下がはつきりしてくると思う。

あまりに廣くわたつて物を見るのも結構だが、一つのをすうつと精讀する。心を注いで宗祖の御精神をはつきりと戴くようにやつてゆかなくてはならんかと思う。確かにこれは自我のある間は、ものにはなりません。こういうところに私が來て役柄といふか宗學に關する事柄に常に心を用いるようになったてゐるが、そういう點について、念佛が宗となつてゐる以上心得ていかなければならんと思う。

ここでそういう方面の事柄に注意して、それぞれの書物を見たりしてゐることで、若い間はあちこち見ましたが、この頃物を見ていくことが狭くなつた。この頃は今までやつていたような讀書とは違つて來て居ります。しかし人の表現を讀むことは大切で、この表現は一つの技術で、それは時代に應じてゆかなければならない。大師の言葉一つでも表現の仕方できてくる。その片言一句が千金に値するよう感じられてくるのです。

現代の法然上人傳

佐藤賢順

読書案内



現代の法然上人傳のうち主なものの若干を擧げて読書案内にしよう。現代といつても、木下尚江「法然と親鸞」(明治四十四年)のような古いものはしばらく措いて、昭和時代になつてからのものだけに止めよう。

まず文學者の書いたもので、上人を扱つたものとしては、吉田絃二郎「法然と教阿彌」(戯曲三幕物、吉田絃二郎全集第二巻收載、新潮社)が古い方である。これは全集の二巻が昭和六年に出ているから、それ以前の作である。もつとも法然は時々ちよつと顔を出すだけで、大體の筋は強盜の張本人天野四郎(耳

四郎)が法然上人の教を聞いて入信して教阿彌と改めたという話に取材して、耳四郎の妻

阿萬とそれに心を寄せる津の三郎とを配し、人間の宿命的な愛欲を描いている。作年「京の時雨」として放送されたのはこれをラジオ用に八場に短かく平明に改作されたもので、教阿彌がもとの人間に逆戻りして津の三郎を追いかけるくだりで、法然が「ゆるしてくれわたしは今迷つてゐる。わたしには何の力もない……。」という一段が省略されている。「京の時雨」は昨年の「浄土」六、七、八、九月號に連載されて、讀者の記憶の新たなことと

思う。

吉田先生については、毎號執筆して下さつていたので、別に事新しく書くまでもないが本誌創刊當時(昭和十年)、私ども數人で先生をお招きして、法然上人を語つたことがあつた。その時は新に上人の戯曲を書いて頂くようお願いしたので、當時評判の高かつた先生の「二條城の清正」のようないいものを書いて頂いて、歌舞伎座の舞臺にのせようというのが私どもの野心であつた。先生も大變熱心にこの企畫に力を入れて下さつたが、まだ機縁が熟せず、實現するまでに至らない。

中里介山「法然」(昭和六年、三省堂)は「勅修御傳要譯」と副題をつけてある通り、昭和の上人傳の一つである。昭和十一年頃、本會が版權を取つて本會から再刊した。介山氏は「大菩薩峠」の作者として名高く、作家の中でも全く独自の道を歩いた人で、法然上人に深く傾倒していた。「上人は日本において本當に宗教を創立した唯一人である」という絶對歸依の心で書いた傳記である。終りの所に法然と親鸞・日蓮の關係を論じて、二人とも

法然なくしてはありえなかつた。二人は歴史的に見て法然を中心としての脇士の地位と見るのが當然だといっているのは面白い。

「浄土」創刊當時、私どもは介山氏とも一夕懇談したことがあつた。介山氏は上人を描くことの難しさをいろいろに述べた。あのようにならぬ人格は誠に書きにくい。偉大な人格を書くのには書く人自らがやはり大きくなければならない。どうやら上手に書けるのは、文覺上人あたりまでで、日蓮となるともう書けない、まして法然は容易に書けない、と語つていた。正面から書かず、弟子や信者を描いて、師法然の姿を髣髴とさせる方法を取るより外に描き方はない。その試みが「黒谷夜話」(昭和六年、隣人之友社)であるといふことであつた。「黒谷夜話」は耳四郎・熊谷蓮生坊・阿波介・室津の遊女友君などを描いて、最後に皆が黒谷の上人の御房へ落ち合うという仕組である。この作は大正十年(介山氏三十七才)であつた。

十一年、大東出版社、豪華版)。小杉放庵の枯淡な挿繪が上人傳にふさわしい。これはやはり本會の事業の一つとして春夫氏に依頼して昭和の法然傳を執筆してもらい。東日、大毎の二大新聞に連載した。春夫氏はその頃、念佛信仰に深く心を寄せていて、「觀無量壽經」(佛教聖典を語る叢書の第四、昭和十年、大東出版社)を書いたほどの人で、格調の正しい美しい文章が評判であつた。「掬水譚」の出版記念會の夜、氏は、

人の世の道に疲れし旅人よきたりて掬え清き吉水

と詠じた。これは「掬水譚」を貫く基調でもある。

氏には別に、聖覺法印の「十六門記」を現代語に書き直した「黒谷源空上人傳」がある。

「浄土」一ノ二より一ノ六まで(昭和十年六月號より十月號まで)連載されているが、單行本としては別刊されていない。

その他、宗派内の人の書いた傳記では、大

佐藤春夫「掬水譚・法然上人別傳」(昭和

野法道「法然上人」(昭和十年、本會、四六版

六〇頁)

矢吹慶輝「法然上人」(昭和七年、岩波、文庫版六二頁)「世界思潮」に書いたものを、宗祖降誕八百年記念施本用に別刊した。

石井眞峯「和英兩文、法然上人略傳」(昭和七年、教學週報社、四六版和文三四頁、英文三六頁)同じ八百年記念出版である。

友松圓諦「法然」(昭和十年、日本評論社、五六版二八二頁)、日本佛教聖者傳の一卷である。

林靈法「法然上人を憶ふ」(昭和十八年、養林精舎、四六版四三四頁)

その他にコーツ博士・石塚龍學氏共譯の「英譯勅修御傳」のあることは忘れてはならない。

しかし以上は残念ながらどれも絶版で、古本屋に搜して貰わなければ、容易に手に入らないであろう。宗祖七百五十年御忌を八年後に控えて、新たな上人傳の刊行が待望されている。

内案書讀



入信のみちびき

大橋俊雄

元祖法然上人がみまかりましてから七百四十二年、その七百五十年御遠忌も間近い。曾つて法然が元祖と仰がれる所以を、聖岡上人は凡そ日本に於ても空也・慧心・永觀などの諸師が居られて、専ら阿彌陀佛に歸依して淨土を勧められたのであるが、宗旨は未だ委細でない、上人に至つて宗旨が始めて興隆したので、元祖と仰ぐのであるといつて居られる。淨土五祖の中、中國の善導淨土教には組織の大體は出來て居つたのであるが、尙未だ教判・所依經典・宗名・傳燈などの、苟くも一宗組織上に必要な點は不充分であつたので、この骨組みの上に肉をつけ、皮をつけて體系づけ組織化されたのは法然上人であつた。

此の法然上人が在りし頃、時と處とを問はず折にふれてつづられた著書や法語、消息の

類は夥しく、其れ等を集めたものに「西方指南」「醍醐本法然上人傳記」「和漢兩語燈錄」等があるが、望月信亨博士はこれに體系を與へ、此等の全てを蒐集して「法然上人全集」とし一冊にまとめられた。これらの著作・法語を通して、私達はみ教を理解するのであるけれども、手近かにあつて、しかし解り易く平易に書かれた、いはば淨土宗入門書があれぱと思うことも一再ではない。そこで此の欲求を満たしてくれるものと云えば、先づ「淨土宗讀本」(大野法道・中村辨康・前田聰瑞共著、昭和十五年五月法然上人鐵仰會刊、市價二百圓)が挙げられるのではなからうか。此書は全篇を歴史・教義・實踐の三部門に分けて、懇切丁寧に淨土宗がもつ全てのものを、萬人に解るように體系づけて書かれている。ここに本書の特色があり、在來の淨土宗綱要

というような概説書とは一見はなれて、誰にでも親しめられ、何時、如何なる時にも容易にひもどき疑問を改める事が出来るように、そして本書の示す道を辿ることによつて、しつかりした信仰に入ることの出来るようにとの老婆心から書かれたもので、歴史筋では釋尊の生涯から、其後佛教が如何にして發達して元祖に至つたかの經路を述べ、次で法然上人の傳記と二祖聖光から行誡上人に至るまでの諸高僧の傳記を連ね、教義篇では淨土の教義、信仰の對象、西方の淨土、信仰の獲得、念佛の意義、信仰生活等の六篇に分け、淨土宗信者としては是非共知つて置かねばならない教義内容を出來得る限り平易に叙述し、最後に日常勤行式の解説とか、回向の意義や祖先の報恩行としてのお盆や、お施餓鬼など八章(實踐篇)に分けて、凡そ日常生活を送る上に必要と思はれるものは、漏らす所なく盛り込んでゐる。本書こそは、淨土宗入門書として一般讀者の要望に答へ得る唯一のものではなからうか。

この外概説書ものとしては、桑門秀我師の「淨土宗義綱要」(明治四〇年刊)や加藤秀旭師の「淨土宗綱要」(大正十三年刊)もあるが大部舊稿に屬するので、入手し難い。昭和に

入つて編まれた千葉良導師の「淨土宗乘要義」(昭和六年發行市價百五十圓位)は、著者が多年の教授上の經驗を生かして物されたもので判教・聖典・目的・方法論・救済・實踐等に分け、平易な叙述で、然も宗の精要を盛つて居り、他に石井教道博士は「淨土の教義と其教圖」(昭和四年寶文館發行市價二百五十圓位)及び「法然上人の日本的宗教」(昭和十五年松林宗學研究會刊行、市價二百圓)の二著を世に問うて居られる。前者は大綱篇、淨土の教義、教團制度、傳戒論の項をもち、淨土宗學に對して論理的組織を試み、教義の成立並びに教團制度の變遷を歴史的に述べられたもので、これを要約し、解り易く説明されたものに「淨土宗講説」(日本宗教講座所收、昭和十年東方書院發行)がある。後者は元祖傳を通して「空前にして然も其直後にもなかつた所あり、支那の地を履まずして純然皇土に於いて一宗を開創された事、又寺院形態を出でて返つて草庵形態に於て一宗建立を唱道された」と云う日本佛教史上の特異性を見出し、何時何處で、誰もが修め得る僧俗通貫の行佛教を佛教實踐上の最後の段階の歸結として、此の觀點に立つて元祖の人格と教學とを見られてゐる。而して篇を發心・法味・化導の三篇に

分ち、一面法然上人傳があり乍ら、他面に於て法味の卷に、淨土宗義の組織内容を織りこんでゐるので、入門書としても適切なものである。又、前田聰瑞師は「法然上人の思想と宗義」(佛教思想大系叢書所收、昭和八年大東出版社發行、市價二百圓)を著はされて居られるが、本書も亦、著者の該博な餘乘的識見を加味して、法然上人のみ教を闡示せんが爲めに執筆せられたもので、内容は法然上人の小傳より筆を起し、次いで宗教學的な立場から通佛教の本源にふれ、更にこれに關連する元祖教學の實質を提示したものである。

此等書籍を讀むにつれて、次第に法然上人の傳も知悉して來るであらうが、傳記は是非共一讀していただきたい。前記石井博士等の著書の外、發行せられて居るものも幾つかあるので、併讀されたい。惠谷隆戒師の「淨土宗史」(昭和廿三年、平樂寺書店刊行、定價百圓)もまとまつた良書で、更に詳細に傳記を知りたい人には近刊の井川定慶師の「法然上人傳全集」(昭和廿七年、其全集刊行會發行、定價五百圓)を御勧めする。

次に元祖の思想信仰を知るためには、其の著書「選擇本願念佛集」も繕いていただければ幸甚で、原文はとも角として多く此書の講説

が古典的な義學に終つてゐる時、服部英淳師は註釋を兼ねた現代語釋を試みられた。即ち「新譯選擇集」(昭和廿三年大正大學淨土學研究會發行、定價百八十圓)である。本書の特色は選擇集の一般在家への普及を希念して、意譯にとどまらず、しかもその説明を文章の中におこみ、誰にでも註釋を要することなく、讀むに従つて自然にそのまゝ理解出来るようにした點で、選擇集中に用いられてゐる佛教語は夫々の使い道により、適當な現代語にうつし、文章の組立ても現代文に改めてゐる。佛典の現代語譯は從來とても決してなかつた譯ではなく、屢々試みられてはゐるが、本書程すつきりしたものは餘り見當らない。尙師には「淨土宗の教理」(佛教布教大系第一卷所收、昭和廿五年佛教文書傳道協會發行、定價百三十圓)がある。本書は内容を淨土宗義の基調、宗祖法然上人と立教開宗、教判と傳燈、阿彌陀佛の本願と極樂淨土、安心、念佛生活の六項目に分け、從來の如き宗義綱要式な型を脱脚して、元祖の眞精神と傳燈を正しく把握しつゝ、他力本願と指方立相の眞義を説き、稱名念佛に統一された實際生活の心構へを明らかにしてゐる。これ又淨土宗入門として適切なもので、敢て推賞するに吝かではない。

文化・宗教

読書案内



竹 中 信 常

近來は案外諄らめてしまつたのが、一頃はやつた「文化國家の建設」といつた言葉を余りきかなくなつた。それとも本當に文化國家になつたから、そういう必要がなくなつたのか。そうならば結構なことであるのだが。

それにしても、私達は平常「文化」ということばを澤山使つてゐる。文化人、文化生活などはまあまあとして、文化カマド、文化コンロまで飛び出すに至つては、人造米も文化米と變名する日の近いことを思わせる。

こんなに親しみのある文化という言葉であるが、案外その意味をはつきり擱んでゐる人は少い。そんなことは哲學辭典が、氣のきいた新語辭典でも索けば直ぐに出て來ること。えらそうに改まつていうことがあるかとお叱

りを得るかも知れぬが、何も私だつて好き好んで文化文化というのではないので、十一月編集子のきつい用命によつて表題の如きものが割り當てられてしまつたからである。

閑話休題。文化とは人間が自らの生活を利用便ならしむるために、自然を改變せしめるとなみである。従つて、文化の目的は人間の生活向上に外ならぬ。先日映畫に「文化果つるところ」というのがあつた。文明人が未開社會（マライ半島）に生活し、文化の縁邊で葛藤を演じた後、終に未開の中に隱没し去るといつたテーマであつた。文化人といえどもその環境と條件とのいかにより、未開の中に没入し去る可能性を持つことを物語つてゐるのだが、ここで考えさせられるのは、私共

の社會にも随分これに似たものがあることである。

文化とは人間の本質、人間の限界を知る事衣食住共に立派すぎる程文化的でありながら頭の中はまるで野蠻な人。成程形の上、物の面では文化的であるが、さればとてそれが人間生活の向上となつてゐるだろうか。だつて動物園の人気者、スーディーちゃんを御覽なさい。彼女だつてちゃんとワンピースを着て自轉車に乗つてゐるではありませんか。彼女の精神はそれによつて向上したであらうか。

私はこう考える。文化は人間によつて生み出されたものではなく、それを生み出す人間の精神構造そのものにある。だからいくら見せかけの衣裳を身に着けても、心の中が陶冶されなければこれは文化でもなんでもない。

そこでこういえる。「文化」というものは知るものではなく、心の糧として味うものである。されば一部の文化學者を除いて、文化を讀書によつて、得ようとすることは無理である。むしろ、讀書することそのことがそのまま文化にならない。そういう意味で、「本をお読み下さい」といえば私の分擔の一半は果た

されるわけである。

だが、讀めといつても何でもよいわけではない。中には逆に品性を下劣にする有害の書物もあるから、その限りでは、矢張りこんなものをといつて二、三の本を挙げる必要がある。

エリオット「文化とはなにか」(アテネ新書

深瀬基寛譯昭和二十六年、一八〇圓)

エリオットは英國の詩人にしてノーベル文學賞の受賞者である。此本はその緒言にあるように社會理論とか政治理論ではなしに、文化という語そのものについての考察で、そのいわんとする所は、人間は懷疑精神を以つて生くべきで、懷疑を通じて始めて人生を眞に理解し得るし、従つてそこにこそ眞實の文化が存するといふにある。

人生理解は同時にまた人間理解であるべきで、その意味で私は

カッシラー「人間」岩波現代叢書宮城音彌

譯昭和二十八年三〇〇圓)

を挙げたい。カッシラーは象徵哲學の主張で人間の人間たる所以はそのシムボリズムにあるという理論が全篇を貫いている。シムボリ

ズムの是非についてはここに云うべきではないが、とに角、一つの理念を以つて人間の立體像を描きつくしているという點で、此書は高く評價せらるべきであると同時に、私共が人間を理解し、ひいては人間の生み出す文化を理解するためにも有効なものである。

人間理解といふことは、また宗教の根本的

態度でもある。釋尊にせよ、ソクラテスにせよ、キリストにせよ、すべて自己——人間を深く見究めた人々である。いつてみれば、文化を眞に體現するには宗教への理解が不可欠である。編集子の意圖が「文化・宗教」というのもきつとその意味なのだろうと思う。

そこで私は、宗教もまた讀んで分るものではないと思つてはいるが、分るには少しは知つておくことが必要であると思つて、ここには

高山岩男「宗教はなぜ必要か」(創文社昭和

二十八年一五〇圓)

をまつ第一に擧げることとする。高山氏はいうまでもなく西田博士の直流たる京都學派の宗教哲學者で、本年度は大正大學に出講され

ている。その内容は世間で所謂宗教と目されている宗教らしいものに對して、嚴しい批判を加え、宗教とはそんなものではないということをも明確に指摘し、更に眞實の宗教がいかに人間生活——特にその精神生活にとつて不可欠であるかを極めて簡明に叙述する。

それから少し専門的になるが

石津照靈「宗教的人間」(培風館昭和二十六年二四〇圓)

も、人間生活の破局を切りぬけて生きて行くために、宗教が必須の役目を持つていふことを各異の題目で捉えて説明しておられる。

そんな固い本ではなく、もつと現實、具體的に、今日の宗教の有様を望まれる方々には、私は次の二冊をおすすめる。

アサヒ相談室「信仰——宗教心と今日の教

育」(朝日新聞社圖書部一〇〇圓)

小口偉一「日本宗教の社會的性格」(東大出版會一二〇圓)

前者は人間の持つ信仰心のありのままの姿を歴史の上から順次描き述べ、松田道雄氏が醫學者の立場から近代醫學の限界と宗教との

關係、特に新興宗教で奥手とされている病氣治療について鋭い考察を示めし、龜井勝一郎氏が「知識人と信仰」と題して、親鸞への思慕を中心として、眞の信仰が知識人にも靜かにしみじみと更け入れられている状況を物語っている。

後の本の著者小口氏は人も知る宗教社會學者、特に近來は新興宗教の批判に活躍しておられるが、此著には、氏が終戦以來ものされて來た論說時評がおさめられており、従つてその述べるところは、現在の日本社會に簇生する新興宗教の實態及び何故このようなものが輩出して來たかということを実、現象に即して端的に示めされている。新興宗教について知りたい方には是非一讀をおすすめる。

期せずして、わが貧しい讀書歴の一端を御披露に及んでしまつたが、秋深まり、燈下ますます親しみを増す好季、外に迫る社會の諸緊張關係、新興宗教の徒らなる喧燥、内に湧き出でる既成教團の非近代性への懷疑、自らの信仰熱度の不足等々を明確に把握し、これを解明するための讀書の一助となれば幸いである。

——一九五三・一〇・三一——

うづもとはとけさま

ある日幼稚園の子供に、「ほとけさまは、いちばんえらいかたで、みんなのお眠りしている間も、いつでも、どこにいても、じつと見て守つていらつしやるお方です。みなさんが、ひとの見ていない所で、よいことをしても、ちゃんと知つていらつしやいます。又、よくないことをすると、悲しくお思ひになつて、先生にお知らせになります。毎日ここで、お手々を合せて、しずかに拜みましょうね。」とこう話をした。

すると翌日泣いてばかりいる五君の母親がやつてきた。「うちの子が歸つてきて申しますには、うちのほとけさまや、愛宕山の神様と、どちらがえらいかつて聞きますが、どうしませう。」そこで「お家のほとけさまは、なくなつた方で、ほとけさまのお國にいつていらつしやる方ほとけさまは、今生きてなくならない方です。愛宕山の神様は、あなたのお家や、同じ町の方を守つて下さる。ほとけさま

は、海をこえたアメリカや、象さんの來たインドでも、どこでも世界中の人を守つて下さる方です。なくなつた方は、ほとけさまと呼ばずに、おじいさん、おばあさんと呼んで混亂しないようにして下さい。ほとけさまが一ばんえらい方というふうに、だん／＼導かれてはどうですか」と云つた所、「では」といつて、とかくするとべそをかく我子を見守りつつ、其日は歸つていつた。

その翌日、母は私の所へその子をつれてきて、頭を撫でながら「さあ、昨日これから泣きませんと云つて佛様に約束したでせう。先生もお願いして下さいましたね。」と云う。「おや、五君はえらね。さあ、ほとけ様におじぎをして來ましようね」と云うと、いそ／＼と園舎に入つていつた。そして、いつも母がついていなければ、泣く五君は、其日から、元氣に友達に交つて立派にやつていくのである。

ほとけさまの話などわからなようでも、わかっている童心に近づきたい尊いものを感じた。

佛 教 (近 刊)

読 書 案 内



眞 野 龍 海

比較的手に入りやすい近刊のもので、佛教
読書案内をしたいと思います。さてよく一口

で佛教とは何だと云へないかと云はれる人が
ある。勿論「佛教とは悪をせず善を修し心を
淨くすることだ」とは有名な言葉ですが、し
からば心を淨くするとは何かとなると際限が
ありません。云うなれば、佛教は、人生と世
界の正しい姿を視、その中に横はる縁起と云
う眞理を知り、同時に其を我身の上に體現し
その活動に及ぼし社會に展開させていこうと
いうもので、その理想を完成せる者が佛であ
ります。

所がこの釋尊の説かれた佛教は其後現在に
到るまで著しい發達をとげ、幾多の貴い人生
社會の經驗を消化し生育しつつあるので、初

めて佛教を知りたい方は、どこで佛教に取り
ついたものやら分らないわけです。

(一)だから、まず佛教の釋尊に近い時代の經
典、及び、根本佛教の教を讀む必要がありま
す。佛教聖典普及版(眞理運動本部、一五〇
〇圓)、友松圓諦著法句經講義(角川文庫一
一〇圓)増谷文雄著、佛教聖典(青山書院、
二五〇圓)等がある。が釋尊の傳記として、
釋迦(講談社、一二二〇圓)、ヘッセのシツダル
タ(岩波文庫・七〇圓)があるが、文學的表
現に重點がおかれてあります。この根本佛教
を中心として平明に、現代人に分かるように
佛教をまとめたものに友松圓諦著現代人の
佛教概論(創元文庫九〇圓)同佛教入門(眞
理運動本部、八〇圓)がある。

(二)さて佛教の本旨に基いて、次第に思索が
進められて大乘佛教といふ形で佛教が理解さ
れるようになった。考への分析もすすみ言葉
の内容も豊富となり、種々な行き方が考へら
れてきた。この大乘佛教の所に基をおいて、
書かれたものに鈴木大拙著無心といふこと
(角川文庫八〇圓)が再版された。同氏は大
乘佛教の中でも禪の方であり、内容もそうで
はあるが、同書に示されたものは佛教の人生
觀の基礎をよく教えてをります。同じく高神
覺昇著、般若心經講義(角川文庫、七〇圓)が
あるが、同様の立場で佛教をのべる心經の解
説であつて、法句經講義と同じく著者がマイ
クを通じて非常な聽衆に感銘の嵐をおこした
ものでしばしば版が重ねられている。

(三)大乘佛教が更にいろいろの天台・眞言・
淨土、等の宗派に分れて、現在日本で見られ
る形となつて「佛教」となつて多くの門を持
つている。従つて、そのどれもを理解するこ
とはできるが自分自身の信仰となると、一人
で同時にいくつもの門をくぐれないのと同様
そのどの門かをくぐつていかなければならない。
それぞれの出版物がありますが、一括して書
かれたものは新しくはありません。このやう
に一口に佛教と云つても、一應、右のような
發展と、行き方とを念頭に入れ、一、二、
三、の讀書順で、整理しながら、佛道を歩ん
で行かれるのがよろしいと思います。

夜明けの冷氣と、深くたれこめた霧とに驚かされて、諏訪で下車したのが六時十五分。待合室で持参の朝食を頬ばる。

その日のプログラムは、午後四時に下諏訪の温泉旅館に到着して一泊語り合ふといふだけで、午前中の予定はまるきりない。いかにも無計畫でのん氣過ぎる旅行のやうであるが、勤勞學生が仕事と學校から開放され、一日のんびりと楽しく過ごさうといふ旅であつてみれば、却つて一興である。

一行十名。五萬分の一の地圖を廣げて「さて、どうしようか。」といつてみたところで、當地では温泉に浴するか、ボートに乗るの他は何にもない。霧ヶ峰へといふコースもあるが、半日で行ける場所でもなく、又強行軍は旅の目的にも反するといふわけで、結局、徒歩往復五軒の距離にある阿彌陀寺へ行くことに決する。

地圖をたよりに、霧につままれながら霧ヶ峰へ通ずる廣い道を進む。

彌陀寺

折原教詮

む。湧き出る湯をタンクから自由に汲み出して洗面をしたり、洗濯をしてゐる人達の姿が、いかにも温泉郷らしく旅人を樂しませる。町を出るとだん／＼登りとなり、石ころが多いがガタ／＼道で都會の者にはまことにつ

らくあたる。石に激し、はげしく流れてゐる清流が、道に沿つてゐるあたり、屋根に石を載せ、軒のかたむきかけた民家の狭き庭に、柿數株、目をうばふばかりに眞紅の珠を輝かせてゐる。

さしも深かつた霧もいつしか霽れて、視界が急に開ける。行手一面に横がる山々の紅葉と、頂き近くまで耕された畠とが朝日に映え道の兩側にはほんの二、三坪の田が階段狀をなして重なり合ひ、刈つた稻が貧弱な穂を列ねて干されてゐる。

右側の小高い丘に、杉の大木三本と檜の老木に圍まれて、小さな石の祠があり、その側に「彌阿陀寺入口」の道しるべが建つてゐる。こゝから道は霧ヶ峰への街道より分かれ、右の山合ひに入る。

石の多いガラ／＼道はいよ／＼狭く、つま先登りに歩一歩と峻しくなる。あへぎ／＼登るうちに肌はべつとりと汗ばみ、皆上衣を脱ぎ、あたりの景色も何のその、たゞ懸命に登る。かれこれ五丁も登つたと思はれる頃、道の左に老松が一本――何の變哲もない松ではあるが、期せずして一息入れようといふことになる。ハンケチをつかひながら來た道を振り返ると、もう中腹まで來てゐることに氣がつく。遙かに眼を轉すれば、左に南アルプスの高峯が屏風のやうに連なり、點々と白くボートを浮べ鈍色に輝く諏訪湖を眞中に、湖畔に點在する町や村、緩に急に美しいスロープを紅葉に彩られてゐる山々と、諏訪盆地を一望の中に收め得た嬉びは、筆舌に盡し難い。遠望の美しさのみに眼をうばはれてゐた一行は、ふと其處に小さな石碑の建つてゐるのに氣がつく。「接待之松」なる題字が眼に入

阿



る。「辨匡」と誌してある。一同「こんな邊鄙な所に……」と目を疑つて改めて碑文を一讀してみる。

唐澤山阿彌陀寺に信者同信の集ひある度毎に何時からか誰始めたといふことなしに、この松の根方で、寺参りする人達に湯茶の接待を始め、今日まで續いてゐる。その善行を記念して建立したものである。

といふ旨の文面であり、確かに椎尾辨匡先生の御染筆である。山合ひの一寺に通ふ三尺に足りぬ路傍で、一同奇しくも學校長椎尾先生の御筆を拜したわけである。

幾組の老若男女が、一日の生業を離れ、彌陀の慈悲にすがらふと峻しい坂道を登り切つてはつと一息、この松の根方で接待の湯茶に渴をいやし、我が住む町、村の遠望に無心に見入る一時は、いかにその人達の慰めとなつたであらうか。

道は平坦となり、左右の山はいよ／＼迫つてくる。四、五丁にして自然石を積み重ねた門に到る。一步入るとあたりは一轉し、杉木立が晝なほ暗く繁り、思はず冷氣を覚える。石段を右に曲がり、左に折れ、登りつめた所に鐘樓がある。遠慮なく撞いてみる。餘韻錚々として谷間に響し、木々に響く。梵鐘は戦時中供出したのであら

うか、昭和二十六年の鑄造である。

丈餘の大岩を廻り本堂に向ふ。見よ。濃緑の老杉に交つて點々と色づきたる楓と、目も覺むるばかり鮮やかな錦したゝ一本の紅葉との色調に彩られ、屏風なす數丈の岩壁に囲まれた伽藍の結構は、當に一幅の名畫である。本堂の前に停み靜かに合掌する。かすかに石打つ水の音が聞えるのみ、満山靜なくたゞ寂寥の二字に盡きる。案内を乞ふ。粗末な木綿の法衣をまとつた老尼に導かれて、御本尊に御詣りをすませ、見晴らしのよい庫裡の一室に招かれ、皆くつろいで座につく。

さきの老尼が茶をすゝめながら言葉少なに語る日常の生活は、彌陀と同行二人、念佛に明け念佛に暮れるその日／＼である。

許されるまゝに寺の内外を隈なく探勝する。すが／＼しいまでに清掃されてゐる。……

玄關を入らむとして何氣なく正面の柱に眼をやる。

『身のまわり清めて今日の御念佛』

の一句が、はたと私の心を打つた。「芳光」とあるが、さきの老尼なのであらう。

勝地を求め、名所古蹟を訪ねようと計畫した旅ではないが、はからずも阿彌陀寺を訪ね、思はぬ所で巧まぬ自然の美しさに接し、更に「耕して天に到る。」といはれる程酷しい生活と闘つてゐるこの地方の人々の間に、念佛行が深く根を下ろしてゐる相をまのあたりに見て、一行望外の喜びであつた。

戦後の嚴しい世相の中に在つて、微細な有縁信徒の力を結集し寄進したあの梵鐘の響こそ、念佛を唱へる雄い御聲ではなからうか。

通夜布教

ある水死せる老人の爲に

須藤 隆 仙

本夕は御當家のお祖父様の御通夜の席でございまして、實は私、此の隣村の〇〇寺にお盆の御施餓鬼がございまして、その法要に説教をたのまれまして参つたのでありますが、丁度本夕御當家で御不幸があり、そのお通夜にも是非お説教をして頂きたいという〇〇寺の和尚様の依頼によりまして皆様の前に出た様な次第でございます。

何分此の村に参りましたのも今始めてでございますし、勿論御當家がどの様なお家柄であるか、又亡くなられたお祖父様がどの様なお方であられたか一寸も存じませんので、もし生前のお祖父様を知つておりますれば、何かとお祖父様生前中のお話等申し上げたいと思いまするが、何分それと申上げたいと思ひまするが、何分それと申上げたいと思ひまするが、唯此の席ではお祖父様がなくなられたと云

う事丈に對して、お話申上げ共にみ教えにあづかりたいと存じます。

聞く所によりますと、お祖父様七十八歳の御老齡、それでいて誠に御氣の毒な御最後であつたそうでございます。

七十八と申しますと誠に人間としては決して惜しいと云うよりは天壽を全うされたというお歳でありまして、昔から七十は古來稀なりと申して七十越えたお方は人間の命を惜しみなく過された方と言えましょう。

だがしかし、人間幾歳になりにしても、死ぬという事實に對しては、これで良いという事はありません。七十が八十、八十が九十になりまして、やはり死ぬという事に對しては、せめて一日なりとも、一時なりとも願うのが人間の本心でございます。

御當家のお祖父様にいたしましたとしても、決して此の日、此の時に死ぬなどとは前以つて豫期していた様な事はなかつたであります。又御遺族の方とも、お歳ではあるから、いづつどうなるかという事は考へてゐられた事でしようが、あの日あの時、亡くなるとは夢にも思つてはおられなかつたであります。

しかるに、天のいたづらか、地の禍か、荒れ狂う荒浪の中に此の世の最後の身體をゆだねねばならなかつたと云う事は誠に御氣の毒に存じます。

私は御覽の通りの若輩で、人様が亡くなつたと云う様な嚴肅な事實に對して何等申上げ様な事は出来ませぬ、だがいかなる人が亡くなられても、先づ一番先に考えさせられるのは、その御遺族の方々の御心情と云う

事でございます。

遺されたお方のお悲しみはいかばかりかと存じます。特に親様に對しては其の子供様、夫君に對してはその御妻君、兄に對しては弟様と、世の中に又と無い御血縁の間柄にありましては其の悲しみも一盆痛々しいものと存じます。なかでも親を亡くすると云う事は誠に淋しいものであると聞いております。實は私はまだ親を亡くした經驗を持ちませんが、私の父が其の父、即私に對して祖父であります、祖父を亡くしました時「親を亡くすると云う事は一番淋しい事である。兄弟も亡くし吾が子をもなくしたが、親の死が一番淋しいそれは何故かと云うに、良きにつけ悪しきにつけ、自分と一體もつて、私と一つになつて考えてくれるのは親丈である」と申しております。即、自分の體と一體となり、自分の心と一體となつて喜怒哀樂、共に動いてくれるのは親丈である、その親を亡くするといふ事は、つまり親の心と自分の心と二つの心で自分と云う一つのものが出来てゐたのに、其の半分を引きさく様なものである。自分の體を半分にさかれる様なものであるといふのであります。

(21)

今御當家におきまして其のような悲歎に

くれる方が何人かおられる事でございましょう。考えてみますと親様の愛と云うものは誠に大きいものでございました。

今日は一つお祖父様をお慰むする一端として親の愛という事に就いてお話をさして頂きましょう。

此の話はそう古い話ではありません。日市の近村にある豪農がありまして、そこに二人の子供が居りました、上は男、下は女でした。が上の方の君雄は日市の中學に通つておりました。ところが毎日汽車で通う中に悪い友達が出来て、悪い遊びをする様になつて來ました。とうとう中學を終える頃は親も手のつけ様のない程の放蕩息子となつてしまつたのです。男一人より無い家とて両親も非常に心配し何とか君雄を立派なあととり息子としたいと色々力を致したのでありますが、なかなか一朝一夕には良くなりそうもありません。

其處で思案にあまつた父母は遂に相談の結果、日市に住む遠戚の家に君雄をあづける事に致しました。幸に其の家の人達は皆立派な人達ばかりで君雄の悪行を矯正するにはもつてこいの家柄だつたのであります。

その家に君雄をあづけてから、かれこれ半年が過ぎました。勿論始めからの約束で親の

方からは一切文通もしないし、君雄には嚴重な其の家の人達の監視の目が向けられ、徹底的に心根を叩き直す策が講じられておりました。

所がある日、妹のよし子がお臺所へ用事で行つて見ると、君雄がお櫃を出して手づかみで御飯を食べてゐるのです。よし子はびつくり致しましたが根が利巧な子でありますから、すぐ君雄が日市の家から逃げ出して來た事に氣つきました、よし子は戸棚の中からそつと昨晚のおかづの残りのお肴を取つて君雄の前にだまつてさし出しました。

實は君雄は一カ月程前から日市の家を飛び出していたのです。そして浮浪人の中に入つて暗から暗と流浪してゐたのですが金と一錢もなくなり、空腹にたえかねて、こつそりと自分の家の勝手口からしのび込んで、自分の家からお金を盗みとるつもりでいたのです。空腹の爲、お金よりまず御飯と、臺所でむさぼつてゐる所を妹に見つけられたのでした。日市の家では責任を感じ實家へ知らせずに君雄の行方を探していたのです。

君雄はものも言わずに恨むような目つきでよし子をにらみながら肴を食へました。親に知られると悪いと思つてよし子も何も言わず

に兄を見守つております。

やがて食べ終ると君雄は再び庭へ下りました。引きとめようかどうかと小さい胸ま騒がせてゐるよし子を後に、君雄はお金の方は断念して吾が家から引上げるつもりだったのです。

丁度其の時、カラカラと臺所の戸が開きました。物事に敏感な母親、何で此の事件に氣づかぬはずはありましょう、お母様はさつきから蔭で此の事を氣づいていたのであります。

「君雄、どこへ行くの、お母様は且市の家へお前をあづけた時、且市の家から歸つてくる時は臺所から入れとは言いませんでした。お前が臺所から入る様な人間であるうちはお母様の子供だとは思いません。お願いだから今度来る時は立派に表玄関から入る様な人間になつて来ておくれ」

お母様は厳しい口調で君雄に言いました。此の母の言葉がすさんだ君雄の心に尙冷たくひびいたのか、さつと顔面に憤りの色を表わした、君雄は吾が家の裏口を走り去ろうとします。

「君雄、おまち、これからどこかへ行つても、腹がすく時がくるであろう。その時の用

意にこれ丈はお母さんから上げておこう」

母親が出した新聞紙包、いいえそんなものいらぬと突き返そうとしたが、思い直して君雄はその紙包を受取るが早いか疾風の如く走り出しておりました。

やがて何町も走つた事でありましょう。いつの間にか君雄は重い足を引づりながら、あてもなく歩いておりました。

日が西に傾いた頃、君雄は吾が家から數里もはなれたある村の小高い丘の上に腰をおろしておりました。

カアカアと鳴きなが歸る鳥の聲に一益空腹を感じます。君雄は無意識の中に母様から頂いた新聞包を開きました。中には省白なおにぎり二つ、不さまにつぶされてあります。あんぐりと噛みついたおにぎりの中に、君雄はふと變な齒あたりを感じました。何かおにぎりの中に妙なものが入つてゐるのです。

割つて見ますと、なんとまあ、その中にはくちやくちやにまるめられた百圓札が入つてゐるではありませんか。

戦争前のお話ですから當時の百圓札はたいしたものです。

もう一つのおにぎりを割つてみますと、この中にも、やはりもみくちやにまるめられた

百圓札。

ぼろぼろと御飯つぶのついた百圓札二枚を前にして、思わず君雄の目から涙がながれしました。それはいまだかつて味つた事のない頬へのあたたかみでありました。

するすると頬を傳う涙のあたたかみの中に君雄は母の心があたたかく自分を抱いていてくれる様な感にうたれました。そしてそは始めて知つた母の愛情でもありました。

やがて世界が明るくなつた様な氣持で君雄の足が強く吾が家への道をふみしめておりました。かくておにぎりの中に入れられた二枚のお札は君雄をして立派な其の家のあととり息子たらしめたのであります。

皆さん、此處に物語られてゐる親の愛、まあ何と云う有難いものではございませんか。

およそ世の中に如何なる立場にある人でも親と名付けられる人は、それぞれ表現は異つても、皆此の様な、これと同じ様な苦勞をしそして深い深い慈愛をもつて子を育てていくるのであります。

今御當家におかれましても、特に御祖父の直接のお子様にあたられる方々は、亡くなつた御祖父様に對して深く其の御恩を感謝せね

ばなりません。

同時に此處においでの方々様も、此の御祖父様の死と云う事から一體何を學びとらねばならないでしょうか。

申す迄もなくそれは明日知れぬ命と云う事であり、老いた老いないの別なく、とにかく人間は何時、いかなる場所でもどの様に死んで行くやも計り知れない。そう思うと今日こうして生かされて頂いてゐる事が誠に意義深くなつて参ります。

明日知れぬ命、次の瞬間が解らぬ生命であつてみれば今日この日、今この一時を、誠に有意義に過さねばなりません。

そしてもし私達が此の事實に氣付いて日々を意義深く、有難く暮したとせば、どんなにか御祖父様もお浄土でおよろこびの事でございましょう。

亡くなつたお祖父様はもう二度とは歸つて参りません、されば私達は此の様にして日々立派に暮すと云う事に於て、其れが最も尊いお祖父様への追善業となるのであります。

佛教の教えは、特に浄土宗の教えは唯徒に死を悲しむ教えではありません。亡き人の御追善に立派にその人と共に永遠に生きると云うのが眞の浄土宗の教えであります。そして

亡き人の追善も、又私達が此の世を立派に過すと云う事も皆南無阿彌陀佛の六字の名號を稱ふる事によつて現實されるのであります。

最後にお祖父様の御爲め、返りては私達のために南ムアマミダ佛を十邊程唱えまして共々

にお祖父様の御冥福を祈り、私達の正しき生活への誓と致したいと存じます。どなたも合掌して下さい。

令聲不絶具足十念稱

十念

私と五重相傳

西 大 隆

私は師匠寺の法類である、今の寺に招待されて住職することになつた。老僧も五十年近く住職して居て、不幸にも大正元年近所の火元に類焼し、假建のまゝすとして來たが、常に五重を一度勤めたいと思ひながら、とうとう勤めず終つた、なげ

日も六ヶしいと思つていたが、まいつて聞いていると全くもどる氣になれずとうとう勤めてしまいましたとの答え。私はよかつたと喜んでゐた。それから一枚起請文勤行のお經まで覚えていた。

昭和十一年老僧三回忌に五重を勤めるべく相談したところ、此二人が賛成して僧徒を勤め、ついに勤めること決し谷田探海僧正を招して行つた。時は一番大雪の時、三月廿日の事で境内の雪は實に五尺、その雪を全部下の畑に檀家總出にて除け、一間半に六間の掛出しを建て六十人餘の授者を收容した。實に此山間にしかも何十年目の大雪に、此法要が勤まつたといふことは、組内寺院も驚かれた。是、全く老僧の長の思ひが通うて、御佛の加護と共に出來たものと、喜こんだこととであります。

何というても聞かねば判らん、座を重ねて聞くと云うことが、信仰の始めであり、聞くと自然に信仰の光は出るに相違ありません。(兵庫縣城崎郡淨徳寺作職)

どうじやろうと考えていると毎日参いつて來ている。とうとう七日間参り終へた。あとで聞いて見ると、初めはとても二



○フランスのマチス、ピカソと並び稱せられるルオーの畫展を見る太い線、盛り上る様な迫力、かげに秘められている憂愁、人間への郷愁、そして宗教的な流れ、それは、見る人各様ではあるうが、徒らに繪具をキャンパスの上にぬりたくった形式的な畫ではない。人間が血みどろになつて畫いた一つ一つである。

晩秋、郊外のキリスト、死の川頑固親爺、赤い鼻、等、その題そのものに已に意味がある。それはひたむきに人間の姿を求め、命を求めあえぎである。一筆／＼が聲をさへ出している様だ。

ルオーは、苦しい人生を送つて來た。孤獨であつた。それ故に、彼は人間の裏に、ある反逆をさへ秘めている。しかし、その反逆は單なる人間憎悪ではない。それ故にこそ、切に求めて、人間の幸と不幸の限界を見極め様とするのだ。

多くの繪に、子供繪の様に、或

は黄色く、或は、青赤く、太陽が輝いている。あれは何を意味しているのだろうか。

何人にも與えられる光。何物にもへだてなくなげつけられる温く明るい光。喜びも、悲しみも、くまなく照らす光。ルオーは、そんなものに飢え、そして求めているのではないであらうか。そして、それこそ、何人もが求めるものでないだらうか。

○小口偉一氏の「日本宗教の社會的性格」と言う小さな本が出てゐる。既成宗教や、新興宗教が對象とされ、科學的な立場で批判されている。

宗教に對する批判が、保守的だ職業化している、呪術性がある等々と言われることは今更目新らしいものではないが、これが、實態調査を基礎にして、何故にそうなつたかを究明している點には、一應聞くべきものがある。

因襲的な信仰の中に本當のものはなく、人間の心からの叫びの中に求められてこそ眞の信仰がある點よりするとき、こうした反省をこの中に求めることもよいことであらう。

○大正大學の改築された講堂で、淨宗會主催の十夜音樂法要が、推尾大僧正導師のもとに、淨宗會學生を動員して行われていた。音樂法要と言つても、六時禮讃が、雅樂の伴奏で行われ、散華が爲されていくだけではあつたが、この上なく優雅な禮讃の音律が、人の聲と、樂器の音とを折りまぜて、響いて來る感じは、自らに宗教的な喜びを、ある陶醉と共にもたらして來る。

最近、京都の知恩院で、毎月二十五日に行われて居る、京都在住の宗門學校學生生徒に依る音樂法要も、大變近代的で、而も莊嚴なものがあるといっている。推尾僧正も、この頃、大いにこの事を強調して、増上寺でもこれるやる様に努力して居られる由。法要が、唯、今までのありきたりなあり方であるときは、いつかは時代と共に置き忘られて行くことも多い。これが完全でないまでも、何か工夫をこらしたものがどんな／＼出て來れば、自らこんな形の中から養われて行く事だらう。

○或る友人が病氣で死に瀕しているのを見舞う。骨と皮になつた顔に目だけが異様に光る。苦しうにせいに呼吸をする。こゝ数日間にはリンゲルだけが彼の命を支

えている。

會つては、仙人の様に、漂う如く生きて居たこの男が、生活の前に、完全に肉體をこの世から奪われ様としている。或る友人の、獻身的な肉體的、經濟的援助は、貧窮のどん底にある病人を、入院させはしたが、最早や、彼自身の肉體が、何物も受けつけ様とはせず刻一刻と死が近づいていく様に思われる。

會つての仙人も、一度びこの窮境に陥るとき、始めて、生活力の必要を痛感し、自分の無力を後悔している。そして、今は、思いもかけなかつた入院に、しとど涙にくれてゐる有様である。生きると言ふ事は難しい。しかし、又生きると言ふ努力がない所には、生きる道はない。佛教に云う縁起とは、こうしたつながらの中に、總てがあると言ふことなのであらう。自分で生きてゐると思つてゐるが、決してそうではない。必ず大きなつながらに支えられて生きてゐるのだ。些細な話が、目の前の病人がそのよい例である。





經典捧持ということ

赤尾敏弘

經典を捧げ持す、經典捧持という言葉は心の内にある敬虔な信仰がそのままにじみ出た言葉だといえると思います。「經典を持つ」だけならばベンを持つとか帽子を持つなど、いうのと餘り大差はないでしょうが「捧」という字があることによつてその内面を表わし又逆にその内の信仰がある所自づからその言葉が産み出されるのだと思います。

私が嘗て學生時代に或先生からこんなことを聞いたのを今でもありありと覚えています「お經というものはたとえ十分暗んじていても必ず經本を持つて讀むべきだ。『經典讀誦』という言葉でも讀み誦するで讀むとは必らず本があつて始めていえる言葉であり又、「看經」というのでも看は又經本を豫想しておるのだ。經典暗誦なんて言葉はないし又その様な熟語も見當らない。その一事によつても必らず經本をもつて讀むことが本筋である。然るに世の人達（特に僧侶ですが）すぐ我建

世願……とやり如見我聞……とやつてしまふ。一語一語味わうことによつて本當に色讀味讀出来るのだ。然も勅語は讀み違えたら校長等は進退伺いさえ出す位だが御存知の通りその當時はそうでした——お經を讀み違えたからというのでお布施を辭退する者なんて聞いたことがない。だから一句一句、經典を見て一言半句も間違つてはならぬ。之位の覺悟であるべきだ。とこう言われたのを今以て私自身には勿論他の人達にも良い言葉として覚えていますが此の言葉の中に捧持するという言葉の内面のつつましさに通ずるもの又そうあるべきものを教えていると思ひますし尊いことと思つています。ところが仲々そうはいかずに捧持するが持つるになり經典讀誦が暗誦になり果は經を誦しながら他の事に氣を散らしたり同じ所をぐるぐる廻つたりし勝なものであります。

更に又「經典捧持」という言葉を聞くとこ

んなことも思ひ出します。即ち「左手にコーラン右手に劍」という言葉であります。私にはどうも之は納得し兼ねるので勿論破邪の劍という語もあるにはありますが何か強制、權力流血、ということがすぐ浮び出て信教の自由なんては勿論ありませんし少なくとも平和的ではなく信仰弘通への熱烈さに於ては強くなくてはなりません。左手にコーラン右手にもコーランではいけないのでしうかといいたくなります。又後醍醐天皇があゝ北面の御陵として有名なように、左手に法華經を持つて「たとえ身は死すとも北狄の天を仰がん」といつてなくなられたとかいいますが痛ましいものをひしひしと感ぜざるを得ません。中學校の頃の九州旅行で見た福岡に立たれる日蓮上人の銅像も確か法華經を左手に、もつて沖の方へ向つて立つておられたように記憶していますがこのことも後醍醐天皇の場合と通ずる何かを感じるようです。

私の淺薄な感じからあれやこれやと思ひついたりたまたまを記した譯ですが「經典捧持」という言葉は矢張り最初に書いた様に自分の信仰の内面のつつましきそこから捧げ持する。私はそれで良いのではなからうかそれが本當の意味ではなからうかと思ひます。或はそんなことだから……といわれる恐れは多分にあるかもしれませんが。（兵庫縣黒井高校教諭）

現代の短歌

太田水穂について



上 木 彙 葉

○八千鋒の千鋒の杉生こだまして

山の八つ尾を鐘なりとよむ（歌集つゆくさヨリ）

○秋虫は月がてらせる面かげの

ひとりの宿をめぐりて鳴くらむ（歌集山上湖上ヨリ）

○蓼^{わさび}上蓼^{わさび}葉のにはひ胸に沁む

いらいらしさを啼くとはするか（創作五號ヨリ）①

○野毛山の異人屋敷に小米花

まばらに散りて夏さやかなり（注）

○風もなき日ののどけさにおのづから

さやげる竹か音もかすかに

○あかあかと日暮るる空の風焼に

吹き流されてゆく鴉あり

○かけめぐる夢の枯原かぜ落ちて

しづかなる世に眼ざめたまへり②

太田水穂と云う名前は四十歳以上の御婦人にはおそらく懐しいにちがいない。長い間婦人雑誌の和歌の選をやつていたからである。

明治三十八年三十歳で倫理科高等教員試験に合格、四十一年には「土埋」なる小説を書き島崎藤村に認められたが、四十三年に若山牧水の「創作」が發刊されるやその一號に詩壇評を、三號に歌人評を、四號に「鎌倉期の抒情詩人」を、五號には前出①の和歌外二十二首を發表している。更に四十四年新小説に「痴狂人」を、四十五年には「新譯伊勢物語」なる單行本を世に問うており、「新詩歌の位置並に各流派」「疑問の解決と個性の質量」なる論文を書いたのもこの頃であつた。高等教員試験に合格するといつただけでも非凡であるのに、この受験勉強をしながら小説を書き、歌評詩評もし、式子内親王を紹介し、作歌もするのだから彼の才分はたいしたものである。ところで②の歌は芭蕉の「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」から、③は「馬はくはくわれを繪に見る夏野かな」から、④は「初しぐれ猿も小義をほしげなり」からの着想であらうが、氏の芭蕉研究は有名なもので

○野は花の極樂日和旅日和

馬ほくほくとゆくすがた見ゆ③

○くれまどふ人の心のしぐれぞら

猿も小簀を着てきたりけり (歌集雲鳥ヨリ) ④

○この小さきませの庵に春鳥の

よろこびをしてゐたまひにけり⑤

○青苔に椎のこぼれの日をふみて

僧形ひとり来る白き足袋

○音ふかく障子をおして来る冷えの

大雪つもる夜のけはひなり (歌集冬菜ヨリ)

芭蕉の事について何か論議をかわす場合「太田流に解するならば」と發言する人が必ずいるくらいである。⑤は良寛の「むらぎもの心たぬしも春の日に鳥の群り遊ぶを見れば」を思い出しながら良寛堂を訪れた時に作つたものであろうが、同じくここを訪れた橋田東隱の「寒しぐれ沖より晴れて堂の扉の淡き日ざしとなりにけるかも」と比較した場合、後者には單なる寫生歌とは云つても捨がたい抒情がある。また早稻田大學校歌の作詩家相馬御風、彼も才人として一方の雄であつたが、晩

年良寛に私淑する様になつてから歌風が枯淡となり、色調も技巧も無くなつてしまつてゐるのだが……………。

前出の歌よりみると水穂の歌風は自然詠風が多く、なるほど良寛や芭蕉の境地とも云うべき幽玄體なるものが汲取られてゐるが、あまりにもそれが象徴化しすぎていないだろうか。即ち歌格があまり高くないと云う歌壇の一般論にも頷けるのである。彼と茂吉との寫生論に對する論戰はあまりにも有名であり、「國語と國文學」誌上に久松潜一博士をして

「本書は和歌史として質量ともに注木すべき業績である」と評せしめた「日本和歌史論中世篇」の近著もある。ともあれ水穂の研究には典據を示したものが少いのも、氏があまりにも才なるを以ての故か。どうも論がかちすぎた作が劣る様に思えてならない。

○自意識の抵抗力も無くなりしかこのごろわれのよく眠ること

(注)彼の主宰する短歌雜誌「潮音」創刊號に載つたもの。△前述の日本和歌史論中世篇もこの誌上に昭和十六年から二十年まで掲載されたものであり、茂吉の寫生論に對する反擊も第三號(今から四十年前)から九年にわたつて「短歌立言」として書かれたものであつた。

(筆者「心の花」同人)



京都奈良を巡りて



齋藤昭俊

京都の町は寺と格子戸で京都らしい雰圍氣を漂わす。大きな寺々が聳えるところは確かに緑の木々に映つて一幅の繪である。

知恩院に岸門主を訪れる。知恩院の建物に威壓された感じ。寺務所をおとのうて訪問の用件をのべる。やがて案内された管長部屋につづく應接間は落着いたものをもっている。門主は私が入る前から出ていらつして迎えてくれた。眞の信仰人という感を深くさせた。黒谷の法主を訪れたときもその態度からにじみ出る柔らかさは私を捕えてしまった。京都の味はここに見出されたと思う。

——◇——◇——
翌日京都の風光を賞でに出掛ける。しかし

私に與えた感激は少なかつた。それは餘りにも觀光地らしい觀光地になつてしまつてゐることだ。多くの一時客のために、又その宣傳のために自然の美、人工の美が破壊されてしまつた。折角の自然の美を宣傳のために看板で破壊する必要はない。自然の美はそれ自身で觀光の意義をもつものだ。私は破壊された風景を傷められた心で眺めて來た。庭園の配置の調和も心なき人々によつて意味を失いつつある。哀れなるかな京の町よ、京の寺々よ寺それ自體の意味を觀光客は認めないからである。ただ見られる寺としてその存在を支持されているに過ぎぬ。

——◇——◇——
京の情緒はだらり帯とは岸の柳に味える。兩者はよくマッチした一枚の日本畫を思わせる。だが現在は柳の下をカツコン下駄を鳴らしながら行き交う舞妓の姿は少い。祇園の町は格子のあけ立てに明け暮れするが、舞妓なき祇園は妙に寂しく、わびしい。薄暗い感じはだらりの帯によつて引き立てられ、ほのぼのとした情緒をそこに浮き出す。

——◇——◇——
奈良に遊びに行こうと思つて京都驛に立つていた私に見知らぬ外人が話かけた。英語な

ので態度から想像して英國人かと思つた。話している中フランス人であることを知つた。おだやかな純粹な歐州人。その名は Maurice Schmid. 一週間の旅を日本に求めた。東都、奈良、大阪、別府、東京、日光、そして私があつた日から一週間後には香港だそうである。私は奈良は始めてだが案内をする。奈良驛を下りてモリス氏の宿奈良ホテルに直行そして晝食後奈良一巡。奈良の町は京都よりも幾分自然美を保持している。だが餘りにも足あとが多すぎる。荒されつつある。

モリス氏はエンジニアだが、繪に興味をもつてゐるだけ佛像に對して強い關心を示した狩野派のことを知つていたことには驚いた。私も佛教徒として佛の説明をしてやつた。

モリス氏は私に對して非常に感謝していた日本人はとても親切だといつていた。別れをつげるとき涙ぐんでいた。異國に來て自分の意志を通ずることの出来る人を見出し得た喜びは大きかつたのだらう。それだけに又一人となる寂しさはことの外であらう。話は文學哲學、美術一般に亘つて、私は奈良で得た喜びは未知のフランス人と心ゆくまでとは行かないまでも、片言の外國語、モリス氏も片言の外國語でともかくも話合ふことが出來た。そしてモリス氏が云つていたように奈良の多くの佛達に會つた喜び。奈良の表情は奈良の佛達が表わしている。優雅、靜寂、善美、圓滿を心ゆくまで味わさせる。心を澄ませる佛達、それは奈良のよさである。

勢觀房源智上人のことども

小 俣 昌 雄

勢觀房さまと一枚起請文

私達は朝夕のおつとめの時、必ず「一枚起請文」を拜讀いたして居りますが

もろこしわが朝に……

といふ、あの私達にとつて最も親しみ深い御文は 元祖法然上人が今から七百四十一年前の建暦二年正月廿五日 大谷の禪房で正念往生を遂げられた、丁度その二日前、元祖さま手づからお筆を取つて書き残された御遺言でありまして、浄土宗の極意を説いて餘りあり、その切々たる御教示は今に尙いき／＼と私達の心をうるほし、正しき信仰生活の道標となつて居りますが、この御遺戒こそ、元祖さまのお傍近く日頃からお仕へして居られた勢觀房源智上人の切なる願ひによつておつかわしになられたものであります。

その折のいきさつについては勅修御傳に

上人終焉の期ちかづき給て 勢觀房 念佛の安心年來御教誠にあづかるといへども なを御自筆に肝要の御所存一ふであそばされて給はりて のち／＼の御かたみにそなへ侍らんと申されなりければ 御筆をそめられける。狀云もろこし我朝に……
(中略)……一向に念佛すべし云々、まさしく御自筆の書なり
まことに末代の龜鏡にたれるものか 上人の一枚消息となづけ
て世に流布するこれなり

と傳へて居り、勢觀房さまがもしあの時お願いにならなかつたならば この一枚起請文も或は書かれずにしまつたかも知れませんが
かく思ひます時、勢觀房さまは私達にとつて忘れてならぬ大切な方
と申せませう。

勢觀房さまと知恩院

勢觀房さまと私達を結ぶ因縁は、併し之だけではありません。それは元祖上人往生の地大谷の聖域に建てられた御廟所知恩院の第二世をつとめ、知恩院創建のため並々ならぬ御苦勞をして居られるといふ事です。

御承知の通り、知恩院の前身たる大谷の禪房は元祖上人が淨土の宗義を弘通せられる上の中心地でありましたが、建永二年二月元祖上人七十五歳の時、有名な住蓮安樂の事件のために元祖さまが遠く讃岐國に配流せられましたので、いつしか禪坊も荒廢に歸し、其後四年建暦元年十一月やがてゆるされて大谷の地にお戻りにはなつたものゝお住居がなく、ために慈圓僧正の好意で山上の南禪院にお入りになりましたが、それから僅か二ヶ月程で元祖さまはお亡くなりになられたのでした。

然も元祖さま御入滅の後と雖ども安き事なく、叡山の僧徒のために坊舎を壊され、廟塔まで發かれようといはしましたのを、漸くの事に御遺骸を嵯峨に移し、やがて栗生野にて荼毘にふするといふ始末で、一時この靈跡も全く廢滅に歸してしまひました。

それを勢觀房さまが文暦元年丁度前の事件から八年目に、漸く大谷の舊地を復して佛殿を建て寺院の制に則とつて始めて知恩院大谷寺と號し、元祖上人を仰いで開山第一世とし、茲に今日見るやうな

七堂伽藍競ひ建つ總本山知恩院の基が開かれたのであります。

勢觀房さまのこのお仕事は當時の狀勢からみて決して容易な業ではなかつたと考へられますが、特にその人柄が、後に述べますやうにたゞ隱遁をこのみ獨り靜かに稱名三昧明け暮れするといふ方であつて、元來このやうに世間に出て人の表に立つといふやうな方ではなく、それだけにこの知恩院建立の大業を通して如何に元祖上人への追慕と護法の念が強かつたかゞうかゞわれ、自づと頭の下がる想ひがいたします。

勢觀房さまの御生涯

勢觀房さまの御事蹟については勅修御傳の中に卷四十五をはじめそここゝに記され、亦淨土續流祖傳や拾遺古德傳などに傳へられて居りますが、日頃元祖さまのお傍近く仕へて見聞した事や御自身問答された事などを書き集められたものに淨土隨聞記があります。

勅修御傳によりますと、勢觀房さまは故備中守平師盛卿の遺兒で小松の内府重盛公の孫に當たられる方で、壽永二年にお生れになりました。丁度平家滅亡の時に遭ひ、母君は世をはぐかつてかくし育てられましたが、建久六年元祖上人六十三歳の時、十三歳で元祖さまの門に入つてお弟子とされました。

それから一時叡山の慈鎮和尚の下にさしつかわされ、そこで出家得度をいたしましたが、いくばくもなく再び元祖上人の下にお歸へ

りになり、其後はずつと元祖上人の御入寂までお傍を離れる事なく常隨給仕のつとめをおつくしになりました。

元祖上人が黒谷に隱遁されてから大谷の地に御入寂になられる迄その間、親しく受教傳法を受けられた人々は決して少くありませんが、常隨給仕の弟子としては信空上や感西上人それに勢觀房さまを加へ前後數人にすぎなかつたやうです。

そのうち信空上人は黒谷時代已來のお弟子で常隨給仕五十年に及び、事ある毎に元祖門下の上首として先立つて事に當り、元祖上人の信賴も亦殊の外に厚く、御遺言によつて黒谷と白川の本房を譲られて居りますが、お歳も十三程しか違はずお互に氣心の分かつた兄弟のやうな親密さで結ばれてゐたのでせう。

この信空上人に比べ、勢觀房さまは晩年の弟子であり元祖上人にとつていはゞ孫のやうな方であり、世をはゞかる平家の孤兒であることも不慙に思はれた事でせうが、他のお弟子がそれ〴〵過去をもつてゐるのに比べ、純眞な少年時代に元祖の門に入り唯ひたぶりにお傍に仕へ淨土の教を旨として稱名三昧に勵む勢觀房さまのお人柄を、

元祖さまは亦大變お慈しみになられたのでせう、勅修御傳にも

憐愍覆護し玉ふこと他にことにして、淨土の法門を教示し、圓

頓戒はこの人をもちて附屬とし給ふ

といはれて居ります。

元祖御入寂の後は元祖上人ゆかりの地加茂のさゝき野に功德院を建てゝ住し、専ら稱名三昧に過されましたが、この功德院こそ現在の大本山百萬遍知恩寺でありまして、圖らずも淨土宗によつて樞要な由緒ある大寺の中二ヶ寺迄の祖となられたわけでの事は一重に勢觀房さまのお徳の然らしむる所と申せませう。

かくして勢觀房さまは暦仁元年十二月十二日、元祖上人滅後二十六年、御歳五十六歳を以つて靜かに往生をとげられました。その折の模様について同じく勅修御傳には

頭北面西にして念佛二百餘遍 最後には陀佛の二字ばかりきこえて息絶へ給ひにけり。佛前より異香薫して臨終所にいたる。

そのひとすじのにはひ數日きえざりけり

と傳へて居りますが、南無阿彌は口の中、たゞ陀佛の二字ばかりがどうやら聲になつてきこえるといふ言葉は眞に臨終間際の様子を傳へて餘りありといへませう。

勢觀房さまの人柄と平家滅亡

勢觀房さまの御事蹟として知恩院並びに知恩寺創建の大業は勿論特筆大書されなければなりません。そのお人柄はむしろ世を遁れて只獨り一途に稱名三昧に明け暮れる生活を求められ、多くの大衆を集めて法談を試みる等といふ事さへ避けられたやうで、勅修御傳にも

勢親房一期の行狀はたゞ隱遁をこのみ、自行を本とす。をのずから法談などはじめられても所化（聴衆）五六人よりおほくなれば魔縁きをいなむことくしとてとゞめられなどしける

と傳へられて居ります。

想ふに、信仰に生きる道は、自分への反省や世間に對する深い洞察を通して、自ら思ひ、自ら行じ、自ら悟り信ずる處にあるのでありまして、元來一人對一人のものであつて唯大ぜいして漠然と讚美歌を歌つてそれで氣分的に何か信仰が得られたやうに思はせたり、又政黨のアジ演説のやうに人々を唯附和雷同せしめればよいといふやうなものではなく、その點、勢親房さまのとられた態度は正しいといへませう。

勿論、勢親房さまがこのやうに極端なまで世間の表に立つことを避けられたのには別に理由があると思ひます。それは勢親房さまの御一家をも含めての平家滅亡の事實とそれに伴ふ源家の平家一族に對する嚴しい追求であります。

お父さまの平師盛卿は一ノ谷の合戰の折、主従七人小舟に乗つて逃れ給ふ處を更に武者一騎が無理に飛び乗つたゝめに舟はひつくり返り、師盛卿も浮きつ沈みつしてゐる處を畠山の郎黨本田次郎なるものゝために熊手に掛けて引上げられ遂に頸をうたれたのでした。このやうにして平家一門凡べてが壇ノ浦に滅び去つた後に於いては京に残された平家の幼い公達に對する追求が極めて嚴しく、曾つて

平家に仕へてゐた乳母のやうな者までが訴人をし、ために「無下に幼なきをば水に入れ 土に埋め 少し大人しきをば押殺し刺殺す」有様で、叔父惟盛卿の長子六代も召し取られて一度は文覺上人の命乞ひで許されたものゝ結局十五年後の建久十年鎌倉田越河のほとりで斬られて居ります。

従つて勢親房さまが十三歳元祖門下に入ります迄の母君の御苦勞は申す迄もなく、元祖上人がお傍近くに置いて憐愍護護し給ふたのも茲に大きな理由があると申せませう。そして、勢親房さまが身を謹しまれる事、人一倍であつた事も之で理解出来ると思ひます。

そして政僧文覺の被護をうけた六代は斬られましたたが、清い信仰によつて鎌倉の二位、尼をも化導せられた元祖上人の御人格が結局は勢親房さまを救はれたわけで、正しい信仰に生きる事が如何に強いものであるかを私達は茲に學び取らなければならぬでせう。

(二八・一〇・二九)

勤行本についての紹介

現代語譯を付した日常勤行式を求められる方が多いので、次に二者を紹介する。一日は京都府八幡町正法寺版、豊田愛山堂發行のもの。上質模造、折本、表紙紺色從來の様式、片面漢文裏面和文、定價三五圓、委しくは同寺宛問合せられたい。その二。清水市本魚町實相寺版、發行のもの。體裁は洋綴、前半に漢文、後半にその和文を収む。定價二五圓、本會にて扱ひます但し、部教に限りがあります。尙今後本會にて現代の要求とマッチせる決定版をといふ聲も高く、研究中であります。

保育欄

○山形縣さくら幼稚園（米澤欣
淨院淵田貫順師）は昭和廿五年
より開園されていたが、この程
第二さくら幼稚園を新設、山形
縣佛教幼稚園の第一として將來
を賜望されている。

○神奈川縣第二住吉幼稚園（園
長森爽海師）では、母の會に佛
教講座を設け、本會佐藤良智先
生が佛教を、淨保連の戸田恭善
氏が佛教保育を連續講演し、多
大の感銘を與へている。

○淨保連理事古屋諦道氏は、十
一月八日その共生保育園の増築
落成式を盛大に行つた。

○茨城縣結坂町弘經寺（住職清
水顯孝師）では、その幼稚園々
會を此程増築、園児三百餘名を
收容、同町唯一の幼稚園として、
佛教保育に精進されている。

芝園だより

○月刊が遅刊することは、致命的
なことであるが、どうにもやりく
りつかずに御迷惑をかけています
が、十二月には正常に戻すべく努
力しております。

○秋はもののみのる時といわれま
すが、本年の米作は悲しいもので
す。農村の方々には金くお氣の毒。
せめてこんな時、心の糧として本
誌がお役に立てばと、考えていま
す。

○靈友會がまた騒動を引きおこし
た。出る杭は打たれるというが、
彼等はこれを法難と稱して、むし
る信仰の誘いの手段としている。
赤い羽根の行方については、來月
本文に書かせて頂くつもり。その
節はどうか、お読み下さい。（竹中）

○宗教大會は盛會に行はれ、討論
も活潑であつた。京都からも惠谷
隆戒、千賀眞順、伊藤眞徹の各教授
が東上にて、現代生活と淨土往
生にも激論が聞かれました。宗教は
こゝをせんと高揚されていた。

○法然上人の信仰は不滅であつて
も、これをどの様にわれわれの生
活と一致にするかは、それ程易し
い事ではない。こうした事が大きい
に論ぜられてこそ、法然教も生き
ると言ふもの、その片鱗を十二月
號に掲げます。

○この所、若い誌友の上京しきり。
京都より眞野孝信氏、信州より澁

谷賢應氏、こうした人々の健筆も
やがて本誌を賑やかにすることと
しよう。

○大正大學の講堂では推尾僧正導
師のもとに、學生に依る十夜音楽
法要が修せられて居た。講堂から
流れて来る雅樂の音、外では圖書
館改築の槌音、仲々この所活氣が
溢れている。

○吉井泰順先生は、學園復興の爲、
全くの東奔西走、學校公債も支部
結成で本格的に軌道に乗る様子。

○法然上人をめぐる人々執筆の小
俣昌雄氏は、早大中國哲學、正大
淨土學出の學徒、當分の間、健筆
をふるつて頂くことになりました
御期待下さい。（安居）

○早朝庭を淨めて、堆い落葉に火
を點ずる。薄青色の煙がやがて林
間を漂ふ。火の色が赤い。もう冬
が来る。

○書を爐邊に緝く日の何かの手掛
りにもと、本號は讀書案内を特輯
した。特に京都に齋藤君の特派な
り、三法主の話を承り、一段とそ
の味はひを増した。各法主とも御
忙しい中を特に本誌のため貴重な
時間を頂き厚く感謝しております。

○竹中先生の言の如く、讀書は、
そののみでは宗教は得られない。
求むる心ある人を得て宗教への門
となる。法然上人傳、淨土宗、宗
教、文化、佛教の各々についての
解説は將來も重寶なものとならう

○石上氏の北邊開教（續）は都合で

來月號へ。

○本號執筆の折原教詮、大橋俊雄、
須藤隆仙の各氏はいづれも大正大
學卒業後研究と宗學專攻に精進さ
れている新進。

○須藤氏教學大會發表の歸途來
所、大に淨土を語る。金一封寄せ
らる。感謝。

○十二月、正月號年内相次いでお
届けすべく頑張つております。
（龍海）

誌代 會費半ヶ年二百圓、一
年四百圓（共）。每號定價三
十圓、前金切次第清算
通知申上げます。確實便利な
振替を利用して下さい。

「淨土」十一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和廿八年十一月十五日發行

（定價三十圓）

編輯兼 眞野正順
發行人 眞野正順

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人遺仰會

東京都千代田區神田保町三ノ
東京都港區芝公園五ノ一〇
電話 東京八二一八七番
電 五（四三）一三二八

F.F.D幻燈機

映寫機(ふつうの映寫機)
と略同じ性能

ミナシキ12880圓送 500圓

マスター13500圓送 500圓

スライド(フィルム)

各巻3~500圓程度、數百種、

一報カタログ進呈

本會代理責任取次(會員には一
割引サービス)

法然上人

井川定慶師著
華頂文庫第一輯

A六・六九頁
三十圓・送十圓

發行所

京都市東山區林下町知恩院內

布教師會

(振替京都八一三番)

法要・年末・年始の施本にトラクトを

浄土編輯部編

信徒必携

浄土信徒としては之だけは知つておきたいこ
と、心得ておきたいこと等を簡單にわかりや
すくまとめた苦心の編輯になるもので、特に
説教、輪讀會用テキストに好適

藤井實應著

一枚起請文

宗義の極致の一枚起請文を敬虔なる信仰の持
主である師がじゅんじゅんと説かれている

(B6 16頁 定價10圓 送料8圓 50部以上割引)
(100部以上割引、一枚起請文は寺名等刷込希望1圓増)

法然上人鑽仰會